

伝道ボックス  
89

命終—亡き人のゆくえ—

蒲池勢至

## 目次

■はじめに.....	1
■永遠の問題.....	4
■お盆という行事.....	6
■妻が抱えた病.....	10
■介護の日々と妻の死.....	16
■どうすることもできなかつたという思い.....	20
■死というものは何か？.....	22
■妻はどこへ逝つたのか？.....	24

■ お浄土とは――	28
■ 「お浄土」と「私」	31
■ 南無阿弥陀仏の声の中で出会う	33
■ 生き抜いていく	36
あとがき	46

【凡例】

・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。

■ はじめに

我ら、生きとし生くる者 衆務にまぎれて聞法を怠り 快樂に  
赴いて真実の教法に昧し しかれども 時至り生命尽きなば 独  
り去り、独り別れ 独り行き、独り死す まこと 無常迅速にし  
て 夢のごとく 幻のごとく 長からんと願いし人生も 顧みれ  
ば一朝の草露のごとし (『真宗表白集 一』法藏館一三五頁)

知らない間に一人の方が、すっと消えて一生を終えてしまう。これは  
ちようど阪神・淡路大震災のときに、浄土真宗本願寺派(西本願寺)の

宗務総長をされておりました豊原大成氏（一九三〇～二〇二二）が書かれた『真宗表白集 一』の中にある言葉で、私の大変好きな表白の一つです。お話にあたりまず紹介させていただきます。

考えてみますと、近年はコロナに翻弄された年でした。ふと思いましたが、私たちはコロナを何とかコントロールしようとしているわけですが、でも一番コントロールできないのは人間です。特に仏教からいえば、私ども一人ひとりの欲です。これが一番コントロールできなくなってきた。そういう社会、生き方になってしまったのかなということを思っています。

コロナだけではありません。日本はすっかり災害列島になりました、

毎年のように地震や水害などが発生しています。またニュースを見れば毎日のように事故死の問題、それから殺人の問題、自死、虐待死、SN Sをはじめとする誹謗中傷……。現代の社会を生きている私たち人間は、<sup>こぶし</sup>拳を握りしめて、亡くなった人の無念、あるいは自分の無念というもの  
を晴らそうとしている。何かそのような社会、人間のあり方を感じます。

そうした社会の問題ということも大事ですが、一人の人間の生き方、亡くなり方、そして、その亡き方のゆくえを考えていくことも大事ではないかと感じております。このことについて、現在私が思っていることをお話しさせていただきます。

## ■永遠の問題

人は必ず命終みょうじゆうのときを迎えます。「命」の「終わり」と書いて命終。仏教でもそうですけれども、親鸞聖人のお書きになったものでも、例えば「死」という言葉で検索すると、あまり出てきません。仏教の中では、死を命終という言い方で伝えているのです。例えば「臨命終時りんみょうじゆうじ」（『阿彌陀經』真宗聖典一二九頁）という言葉があります。命終のぞのときに臨んでという言葉です。私は、「死」というよりも「命終」と表現した方が、いろいろなことを考えさせていただけれると思っております。

私たち人間は、必ず命終のときを迎えます。普通の言い方をすると死ぬわけです。では亡くなった人は、いったいどこへ逝くのか。これは難

しい問題であり、永遠の問題でしょう。皆さんも一回は、いや、必ず考えたことがあるのではないのでしょうか。でも、よく分からない…。

生きている私たちは、亡くなってどこかへ逝かれた方々、自分の父母、奥さんや子ども、おじいちゃんやおばあちゃんと、いったいどこでまた会えるのか、どういう会い方ができるのか。

私は、八年前に妻を亡くしまして、そこからずっと亡くなった後のゆくえについて、私なりに真剣に考え出しました。そのことを少しお話させていただきます。と思っています。

その前に、多くの方が考える亡き人のゆくえ、とむら弔いとはどのようなことかについて、お盆という行事が象徴しておりますので、まずそのこ

とに触れたいと思います。

## ■お盆という行事

一般的に、お盆は亡き人と出会うときだと認識されております。親鸞聖人のお墓所である大谷祖廟おおたにそびょう（東大谷・京都市東山区）からもう少し南へ下がったところに珍皇寺ちんのうじという臨済宗建仁寺派のお寺さんがあります。

そこでは、八月七日から盆の市が始まり、お精霊しようれう、京都の方はお精霊らいさんという言い方をしますが、亡くなった方の精霊をお迎えし、そして送り出すという行事があり、京都の方がお参りをされるといふことがあります。似たような行事は、上京区の千本通せんぼんどおりにある高野山真言宗の